

あゆみ通信

VOL. 120

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

本山報恩講厳修



11月21日から始まった本山報恩講も、28日で結願。とりわけ10時からの結願日中法要は全国から御参詣の御門徒で満堂、堂内から溢れる程だった。とりわけ、真宗大谷派の「坂東曲」は、その迫力は参詣者を彷彿とさせたと。これで、いよいよ、歳末に入ることになる。

総会を新たな出発点に



このように理性主義に立って生きるのではなく、因縁のままに生きることを

教えてくれているのが仏教です。私たちが称える念仏もこの「生かされている私」への目覚めを促しているのです。私たちの先輩がおっしゃったように「念仏は自我崩壊の響きであり、自己誕生の産声である」(金子大榮師)と言えます。南無阿弥陀仏と言う念仏は、「私が生きている」と言う自我による理性主義が崩壊する響きです。そしてそこに、因縁のままに「生かされている私」という自己が誕生する産声です。念仏によって、「私が生きている」という自我の束縛から離れ、理性から解放されて、「生かされている私」という自己が顕現するのです。ここに仏教の教えの基本があります。自我が崩壊して理性が無くなったら人間は墮落すると思うかもしれませんが、そうではないのです。「さるべき業縁」のままに私たち人間は生きて来たのであ

り、現に今も生きているのです。因縁のままに「生かされている私」であるという「自己」によって私たちの人間世界は成り立っているのです。(小川一乗「『私』をあきらかにする仏教」東本願寺出版)

あゆみの会総会

2008年準備会、翌年正式発足の同朋会の一員としてのあゆみの会も10年です。3期、4期のお仲間も参加をいただいて今日を迎えました。あらためてこれまでお力添えを下された皆さんに厚くお礼を申し上げます。これからも「共にお念仏の道を歩む」楽しい会にしていきたいと思ひます。

日時 **2018年12月16日(日)**
午後1時30分～

会場 行圓寺(西成区山王町)

内容 総会(事業報告、事業計画、会計報告、予算案、監査報告)、法話、懇親会

講師 竹内 博明先生
(行圓寺住職)

参加費 無料

今年は、お斎は有りません。おつまみと飲物で懇親会とします。ご了承ください。

その他 2019年年会費受け付けます。

年会費は2000円。ご夫婦会員3500円です。

よろしくお願ひします。

身に沁みる

仏法の教えを聞いて、身に沁みるのは、難中の難だと感じる。例えば、法座で「不安は自分が作り出したもので、自らが悩まされている」と聞く。まさにその通りだと、頭は納得するが、日々の暮らしでは、次から次に不安が起こる。その度に奥底の法蔵さんが「あんた、分かっているか。自分の心が不安の種を作って、それに悩んでいるのだぞ」と、気付かせてくださのだが、また繰り返しに起こる。

「さるべき業縁もよおせば」である。教えが身に沁みるのは難しい。それは、真に仏法を受けとめきれていないことなのかもしれない。「お任せ」を出来ない私であるという自覚。

これを一生持ち続けるのが人間であろうかと。ただ、一つ、聞法を続けることしかない。聞法第一を痛感する。(本)

亡き人を案ずる私が亡き人から案じられている

第2組報恩講報告



2018年11月14日(水)午後5時30分から、阿倍野区の即應寺(藤井真隆住職)で、2組合同の報恩講が、組内の住職や寺族と門徒・推進員42人が参加して厳修されました。続いて法座は、12組の清澤寺 澤田見先生を講師にお招きし「父母の孝養」を講題にお話いただきました。(別項参照)



最後に、お齋をいただきながら同朋総会が開催され、法話の感想や第2組や寺院に対する要望、お手次寺院の活動等報告や意見がありました。(「銀杏通信」から)



如是我聞

細川 克彦(佛足寺)

澤田見先生は「父母の孝養」と言う講題で『歎異抄』第5章にある「親鸞は父母の孝養の



ためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」を引かれ、法事等についての一般世間で理解されている、両親にお念仏を供養するということは、親鸞聖人の言っておられることとは違々と話された。その理由の一つとして、

続いて述べられている「そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々(せせしょうじょう)の父母兄弟なり」について、童話『いのちのまつり』を取り上げられ、私のいのちは父母から受けているが、その両親には4人の両親があり、またその両親には8人の両親がありと、何十代も遡るだけで無数の親から命が続いており、この命は無数の命によって養われており、両親だけ供養すれば善いとは言えないと。



次に第二の理由として、やはり童話『おかげさま』を読み上げられ、お爺さんが孫と散歩して



いる時に、人から話しかけられるたびに「おかげさまで」と答えているのを聞き、孫が尋ねると、「それは生かされていることへの感謝の言葉だよ」と答えていることを話された。そして、お内仏のお莊厳(お飾り)はお浄土の働きを表わしており、お花や打ち敷きこっちに向けられているのは、私たちが仏さまから供養されていることを表わしている。それはまた、私たちが亡き人に供養するのではなく、亡き人から私たちが供養され、願いを掛けられていることを表わしている。



米澤英雄さん

また、米澤英雄という篤信の念仏者の言葉として「念仏は請求書ではなく、領収書である」を取り上げられ、お念仏は道具ではなく、仏様が私たちに供養してくださっていることの受け取り(領収書)であると話された。終わりに本山の参拝所に掲げられている標語「亡き人を案ずる私が亡き人から案じられている」と言う言葉を大切にしていきたいと締めくくられた。合掌。

(今回も、細川さんに写真とレポートをご協力いただきましたことを感謝です。なお、パソコンをご利用の方は、大阪教区の「銀杏通信」にも第2組の活動が出ていますので御覧ください。)



--	--	--